

ナショナル・アイデンティティの形成とその行方

末広鉄腸の世界旅行と『明治四十年之日本』

大 西 仁

はじめに

明治二五年八月から一月にかけて、末広鉄腸はシベリア、中国東北部、朝鮮半島をめぐる旅に出た。帝国議会開設二年後にあたるこの年の二月、総選挙に落選した彼は政治家としての公的な立場を失っており、このことよって、ロシア、清、朝鮮という三つの隣国を実見する機会を得たことになる。同年ロシアでは、早くからその動向が日本でもとりざたされていたシベリア鉄道が着工していた。日本国内では、経済進出の標的として、あるいは東アジア地域に及ぼすとするロシアの軍事的脅威を警戒する意味で、シベリアには大きな関心が向けられていたが、鉄腸もこの極東漫遊で鉄道工事の進捗状況をはじめシベリア地域の状況を視察することを主要な目的としていたのだった。

この旅行の前に、鉄腸はシベリア鉄道開通後の極東を舞台にした小説を構想している。帰国後、この小説の執筆に先立って上梓した政論『東亜之大勢』（明治二六・一・二七 青木高山堂）緒言は、「時は明治三五年なり魯西亞の西列利亞鐵道全く成就す是に於て歐洲に漫遊せし日本の紳士某は魯都伯得堡より此の鐵道に乗り……」^①と小説風に書き出されている。これは近未来に設定したシベリア鐵道完成以後の國際政治に明治二六年の現状と変わらぬ日本を配置することで、当時鉄腸が抱いていた対外的な危機感を問題化しようとしたもので、鉄腸の新小説の青写真であ

った。彼は「此の趣工に因り一の小説を著はさんと」し、親友の大石正巳にこれを語ったところ、この前年極東を旅行した経験のある大石は、鉄腸に「実地の形勢を観察」することを勧めたといふ。^②

鉄腸の新しい小説は、『政治小説 明治四十年之日本』という題名で、前編が明治二六年三月一日から四月一六日、後編が同年四月二六日から六月四日に『国会』に連載され、それぞれ青木高山堂から単行本化された。^③この小説について、柳田泉氏は「現在に基づいて未来を想像し、未来の叙述論評に藉りて、逆に現在に対し警告諷諭する」と述べているが、同様に当時の読書層の評価も、その時事性、啓蒙性に関するものであった。刊行直後の書評を見ると、例えば『朝野新聞』の「新刊雜報」は、「居士の小説（『明治四十年之日本』筆者注）は名は小説なりと雖も実は一部の政事意見なり」と評す。創作の原動力は「時事に感憤するの余焰」であり、「事実を小説に假て時事を諷刺する者」というように、その時事性は「諷刺」ととらえられた。また『毎日新聞』では、「著者は亦大に東洋の形勢に憂を抱き國民を覚醒するに心を用ふる者」と、鉄腸の「政治意見」の内容に踏み込んでいる。評者は「曩に東亜之大勢を著し西比利亞大鐵道成功より生ずる将来の國事を論じ大に政事上商事上の注意を促がし今又斯編を公にす其意婦女兒童にまで對外思想を養はしめんとするに疑なし」と啓蒙的な側面を評価し、「斯の著の如きは近時小説界偉大の文字と謂ふを得べし世の婦女は固より丈夫漢一読すべきの価値あるな

り」と、成人の男性が読むに足る小説だとしているのである。

明治三六年七月までに一一版を重ねた『明治四十年之日本』を、吉野作造は日清戦争前の対清關係を体现したものと、伊藤整は日露戦争を予言したものととして読んだが、このことから、この小説が国民意識および対外的な思潮を形成するという意味で、読者に対する現実的な喚起力を持ったことは十分に推測できる。小説が政治的に機能する、すなわち新しい政治状況を生みだすことに寄与するとすれば、それは単に政治思想や政治的な事件がそこに書かれているだけでなく、政治的な状況が現実と地続きの形でテクストの中に記され、そこからまた新たな政治状況が想像されているからである。『明治四十年之日本』で明らかに意図されるのは、ナショナル・アイデンティティの形成であるが、本論では、末広鉄腸がこの小説の中で、それをどのように想像し、創造したかを跡づけてみたい。

一 未来小説のアクチュアリティ

国民国家創設の機関として明治二三年に開かれた議会は、『明治四十年之日本』では国家の中央集権化を阻害するという逆説的な存在として語られている。この小説が発表された明治二六年前後の政局をみれば、二五年六月には鉄道敷設法案が成立し、鉄道網の計画が国民の前に知らされたばかりであったが、地元へ鉄道をという各地方の誘致合戦はさかんで、所謂「我田引鉄」のはしりの状況を呈していた。また海軍拡張をめぐって増税か「民力休養」かで紛糾した第四議会が、二六年の初めには議会停止にまで追い込まれ、建艦詔勅という伊藤博文の「切り札」で幕を閉じたことは周知の通りである。当時の各新聞には、鉄道敷設や港湾整備をめぐって延々と続く誘致合戦、鉄道の国有化についての議論、

老朽艦を抱えた海軍強化をめぐる賛否両論、そして条約改正に絡む内地雑居論議が連日掲載されている。

『明治四十年之日本』は「未来小説」でありながら、発達した社会が描かれず、むしろこうした同時代のトピックを取り入れる、すなわち明治二六年現在の政治社会を明治四〇年に置き換えることによって「政治性」を発揮している。だが、この小説の時間構成が持つ政治的な機能性は、未来から現在という単一方向の叙述のみによって支えられているわけではない。柳田泉氏が「こゝに描かれた将来の日本の如き立場」の「原因たる現在に警告し、諷刺」するために、「或は過去を語るという形を藉り、或は未来への想像なるかの如くほめかして、反覆これを述べている」と説明するように、この小説は、前編第八回における富山政成がしているような過去語りも、その構造に含んでいる。かつて国会議員だった富山が政界で活躍したのは、作中時間では十数年前の、「明治二十何年の頃にやありけん」だという。このときに彼が経験した一連の出来事 藩閥内閣と民間党の衝突によって、内閣の交代と議会の解散が繰り返され、条約改正交渉も失敗を続ける。この小説が発表された明治二五から六年の政治史をなぞっているのである。栗田香子氏は、明治初期に次々と現れた未来記が表す時間の重層性について、次のように指摘する。

合わせ鏡の間に存在する現在という時点を発見した近代人が、現在から未来を臨む場合、現在から過去へ、そして過去から現在へと二方向の思索を基にした、既存の現在と過去との弁証法的対話が基本となつて、その上に現在から未来を臨むのである。さらに、未来から現在をふりかえる時にも、この既存の弁証法的現在と過去の關係をはらんでいる現在をふりかえるのである。未来を臨むことは自然過去を臨む行為につながり、また現在を反省するときには、過

去からだけでなく、未来からも反省する行為を引き起こす。³⁾

『明治四十年之日本』において同時代のトピックが近未来に配置されているということは、未来を鏡として現在の危機的な日本の状況を写し出すことを意味するが、一方で、過ぎ去った時間を回顧する叙述も同様に、警告すべき現在の状況を浮かび上がらせるのだ。明治二五年から作中現在である明治四〇年まで、政局は混乱を続けていることになるが、それについて、海外から帰朝したばかりの主人公玉野成章は、時の総理大臣松本に次のように話す。

私が海外に在つて十年来の有様を視察しますれば孰の政府も内政外交の方針が確定せず何つても議会に対する方略のみを専一といたされたので遂に今日の如く政事上の退歩いたしましたのであらうと思ひ升
(前編第三回)

この小説の舞台となる明治四〇年の日本は、執筆時の明治二六年の社会状況と照らせば、そこからほとんど「発展」していない。そうした、同時代を生きる読者にとっては実質的に現在に相当するテクスト内の過去と未来が、日本が抱えている社会的停滞を焦点化することになる。

だが、政局の混乱という状況は、そのこと自体は「退歩」ではない。日本の現状が「退歩」と見なされるのは、時間的な階層性を状況分析に持ち込んでいるからである。総理大臣の前で「政事上の退歩」を嘆く玉野は、さらに「先刻も御話申しました通り大鉄道の影響で西比利亜内地の進歩いたすのは驚くべき勢で御座い升(前編第三回)」と続けている。日本国内の状況が「退歩」しているのは、進歩する他国と対比する限りにおいてである。日本の政治の混乱は、対外的な枠組みを想定し国内の状況を相対化する、すなわち国際関係を介して初めて「退歩」という時間的意味を付与され、問題化されるのだ。

『明治四十年之日本』において、日本は朝鮮半島をめぐるロシア、清、

ナショナル・アイデンティティの形成とその行方

イギリスの対立関係の中に位置づけられている。鉄腸が特に日本との対照を際立たせているのは、シベリア鉄道を開通させたロシアである。大陸横断鉄道の開通によって、ウラジオストクは沿海州とシベリアに成立した経済圏の中心都市に発展し、またシベリアの陸海軍も大幅に増強されている。だが日本は、玉野が嘆くように、「西比利亜の大鉄道が成就して浦潮が東洋の一大要港となるのは十年前から知れ切つて居る(前編第二回)」にもかかわらず、「それに対する開港場(前編第二回)」も、そこから首都へ通じる鉄道も、ウラジオストクへの航海路も整備されていない。また海軍の増強も遅々として進まない。そして、清・英の同盟とロシアとの間で始まるうとして居る戦争に対して、一貫した外交方針も持っていない。ロシアだけでなく、清も「鉄道を始め海陸軍備まで全く面目を一変(前編第三回)」させるなど国家装置を充実させつつある状況下で、日本が抱える国家装置や外交方針の欠如は、持てる国に対する立ち後れを意味することになる。

そうした日本の遅れを小説世界の中で補完する国として、朝鮮の存在は重要となる。ロシア、清、イギリス、そして日本が争点としているこの国は、国家として主体的に活動しているさまが描かれていない。例えば元山は清・英・露の好きに争奪するところとなるなど、朝鮮半島にはまるで国家として存在していないかのようである。朝鮮は日本よりさらに後進の国家として、いわば国家間競争の負の中心となり、日本が国際政治に参入する回路として設定されていると言える。鉄腸は明治四〇年における極東の地理的空間に進歩という時間的な分析軸を持ち込むことで、諸国間を序列化し、不均衡な関係をつくりだした。そして、そこに生じる軋みが、「日本人」としての国民的自覚を喚起する原動力となっているのである。こうした構想は、いかにして鉄腸の中で胚胎したのだろうか。

二 鉄腸の世界旅行

極東旅行の以前に、鉄腸自身のナショナル・アイデンティティ形成のひとつの契機として、明治二一年四月から翌年二月にかけての欧米漫遊における体験があったと思われる。明治一九年以來上梓した小説『二十三年未来記』^⑭、『雪中梅』^⑮、『花間鶯』^⑯などの売り上げが好調で、手にした多額の印税を渡航費用に充てたという彼の旅行は、まず、太平洋を航海する汽船ベルジックに乗りサンフランシスコへ、そこから大陸横断鉄道でニューヨークに行き、大西洋を渡ってロンドンに滞在するという予定であった。かつて新聞紙条例で逮捕されたときに獄中で独学した程度だったという英語力ではその行程には苦勞があったが、船中で同じくヨーロッパへ向かうホセ・リサルと知り合い、ロンドンまでの道中は、日本語が話せる彼を「通訳」にしたのであった。この旅行の消息は、『朝野新聞』に送られた「末広重恭通信」と、帰りがけに訪れたパリの見物記『鴻雪録』^⑰の記述によって知られるが、それらによると、彼のロンドンでの生活は五月末に始まり十一月まで続いた。イギリスに上陸早々、リバプールからロンドンに至る汽車の窓から見た、「ドノ村落も田園美麗にして数百里の間に青き氈を敷き詰めたるが如く牛羊到る処に群を為し如何にも愉快の感情を引起こしたり之に加ふるに小都会とも云ふべき市街は前後相ひ望み何れも製造所と思はれ幾千百の烟突より黒烟を吹出す有様を目撃すれば此の国の富饒なるは推して知るべし」といって、国土が均質的に産業化された田園都市の風景に驚いた彼は、さらにロンドン市街の繁栄ぶりを目の当たりにし、また議會、ケンブリッジ大学、ワームウッド・スクラプス（監獄）、マンチエスターの紡績工場、新聞社などを訪れた。だが語学力の欠如から、ロンドンでの生活は決して快適なものではなかったようであり、それは七月二二日発の「末広重恭通

信」に、「此節下宿屋の樓上に立籠り専ら語学の稽古に打掛り少しも世間に交際をせぬ」とあることから窺える。

鉄腸はこの旅行を、滑稽本のスタイルを借りて叙述した『唾之旅行』^⑱で戯画化してみせている。彼自身を擬したとおぼしき田舎政治家忍は、英語がほとんど話せないが、「通辨があれば自分で語を覺ゆることが出来ぬナア二人間であるからマンザラ迷子になり札付きで日本まで送り返される氣遣はあるまい」と、周囲の反対を聞かずに一人で世界漫遊に出発した。だがアメリカ經由でイギリスへ向かう道中はホセ・リサルをモデルにした「魔尼羅人」に頼り切り、彼自身は西洋の習慣を知らないために、旅のあらゆる場面で失敗を繰り返す。その様子は読む者を笑わせるよりも、むしろうんざりさせる尾籠さ、執拗さをもって描かれる。ロンドンの下宿に住み始めてからも「始めて英国の家族の中に入りしことなれば何事も東西が分らず」、食事時には下宿の女主人にマナーの不行届を指摘されて、「毎日一二度は顔を真つ赤に」し、地下鉄でハイド・パークに行こうとすれば、乗る列車を間違えて目的地に辿り着くことができず這々の体で下宿に帰るといった有様である。「横浜を出てから幾度と無く失策したのは語の分らんから起こつたのであるから唾と云はれても仕方があるまい」と自嘲する彼は、やがて外出ができなくなつて英語の勉強のために下宿に籠もることになるだろう。さらに下宿の娘と關係を持つという架空のエピソードがもとでイギリスを離れるときには、フランス行きを勧める友人に、「大陸の詞は少しも知らんから独りで飛び出したら又どんな失策をするかも知れん」というように意氣阻喪している。

この旅行記が「終始一貫して末広の暗い情熱、近代西欧からの疎外をテーマに」し、それは「理知的理解力を拒む壮大な西欧の文化構造に彼の身体的感覚がすでに 西欧近代 を中心化してしまっているから

だとする中川成美氏は、さらにここでの戯文体について、「言葉が通じ合わないからこそ事象、事物の実体へと歩み寄れるかもしれない可能性を自ら遮断して、戯作文体という自己諧謔のナラティブに潜り込む」と指摘している。ロンドン滞在中の、議会・工場・監獄・学校などの近代的な施設を見学した著者の体験、あるいは『鴻雪録』ではパリでの見聞を加えて英仏の文化比較がなされているが、そうした記述は『唾之旅行』では捨棄されている。それは鉄腸が採用した戯文体が、彼が観察した対象への分析軸を持たず、自己を突き放し滑稽化し続ける性質のものだからである。ここでは失敗の連続によって、言語の不通と習慣の無知が強調される。忍は西洋の内側での文化的差違を見失い、その結果現れた、一枚岩的な「西洋」を前に立ち竦むことになった。太平洋を渡る船中で、北米横断の列車内で、ロンドンやパリの街角で、忍は繰り返し醜態を晒すが、「西洋」の桎梏は、こうした失策を、弥次喜多よろしく狂歌をひとつ詠んで笑いに昇華させることを許さず、スタンダードとしての西洋文化を身体化することが出来ないという自己否定に彼を向かわせるのだ。

欧米では文明人としての自己を否定し続けなければならなかった忍だが、マルセイユから帰路につき、北アフリカからアジアをめくり始めた途端、「文明化」された眼で、植民地アジア/アフリカの風俗を「見」はじめると。例えば、近代化を目論みスエズ運河開削時に外資を入れた結果、イギリスの植民地になったエジプトのアレキサンドリアは以下のよう述べられる。

少し大きな建物は皆な西洋人の商店にて、土人の家屋は大道筋にある者にても極めて狭隘にして店前に僅か許りの雑貨野菜類を陳列し憐れ千萬なる有様なり支(ママ)街に入れば低き長屋を幾十にも区画して多人数一所に居住し更に豚小屋に異ならず道路狭くして行

ナショナル・アイデンティティの形成とその行方

人多く過半は跣足にて衣装は泥にまみれ男子は紅巾の上に手拭様のものを纏ひ婦人は異様の頭巾を被り鼻頭より眉に掛け青銅を以て造れる鈿の如きものを垂れ如何にも異様の風習なり処々の珈琲店は小民群を成し顔色醜怪にして衣装の汚穢なる百鬼夜行の図を見る様なり(『唾之旅行』続編91頁)

この後、帰国船が立ち寄る港々で、「餓鬼の澤山遊んで居るのを見れば婦人もたんとあるに違いないが皆んな真ツ黒の美人だから外國人に見せると伴って往かれるであらうと思ふて家の中に閉ぢ込めて置くのだから(エデン)」、「支那人の狡猾なものには驚く(香港)などという叙述が繰り返される。ここで彼が対象へ向けるあからさまに差別的な眼差しは、もちろん無邪気なものではない。彼は自らが中心化してしまっている西洋文明に対する欠損の感覚を、アフリカ・アジア各地をめぐる帰路で補填しようとしている。そして、帰国の船が下関海峡に入るとき、日本の風景を見て「久しく別れし友に逢ひし様なる心持」になり、「同船の西洋人」に山の名を教えながら内心「彼奴等も此の気色の美しいのを見て日本人を尊敬する心が起つたであらう」などと思つように、自らが日本人であるという実感を伴った同定が、経巡った西洋とアジアを参照項にして初めて行われるのであれば、忍の抱え込んだナショナル・アイデンティティ形成のあり方は、鉄腸の極東ビジョンに接続してゆくことになるだろう。

三 極東政治の見取り図

鉄腸が近未来の極東情勢を題材にした小説を構想する直接のきっかけになったのは、明治二五年にロシアがシベリア鉄道敷設に着工したことであるが、鉄腸はこの旅行の見聞を、彼が主筆をつとめる『國會』に

「鐵腸居士漫遊の記」として、また村山龍平の依頼^③により、『大阪朝日新聞』に「末広重恭報告」という題で、ともに断続的に寄稿している。

これらの記事と帰国後に書かれた『北征録』から、鉄腸の極東漫遊の旅程をたどってみる。彼は八月一日横浜を出発後、神戸で郵船会社の定期航路船（月一回神戸→ウラジオストックを往復）東京丸に乗り込んだ。東京丸は下関、長崎を経て、途中釜山（同三日）、元山（同五日）に寄港し、同二七日にウラジオストック着。当地には九月一日まで滞在した。その後、やはり郵船会社の定期船薩摩丸で仁川まで行き（九月一日）、ここで船を乗り換えて黄海に向かう。玄海丸は芝罘に寄港した後、白河を遡航して天津に行く船であり、鉄腸は二三日から三日間天津に滞在した。彼は鉄道で北京へ行くつもりであったが、体調を崩したために北京行きを断念し、二七日から玄海丸で白河を下り、三〇日仁川に三度目の入港をするが、この時は一〇月六日まで滞在し現地の調査を行っている。そこから陸路京城へ赴き、七日から一七日まで滞在した後帰国の途についた。東京に帰ったのは翌月一日で、二か月半の旅となった。

帰国後、鉄腸は小説の執筆よりも先に、この極東行での取材をもとにした二つの書物『北征録』、『東亜之大勢』を上梓した。『北征録』は日記体の紀行文、『東亜之大勢』は当地の取材の結果から日本をとるべき政策を示した政論で、小説『明治四十年之日本』をあわせると、この旅行によって鉄腸が書いた書物は三冊になるわけだが、これらは国民国家の形成期の言説として相互補完的な関係にある。

ここで見てゆきたいのは、『北征録』と『東亜之大勢』が、どのような切り口で訪れた場所をとらえているかということであり、なかでも朝鮮についての言及が重要に思われる。『北征録』の記述によれば、東京丸の最初の寄港地、釜山に上陸した彼は、まず日本人の特別居留地を訪

れ、領事館、郵便電信局、銀行、病院、芸妓のいる料理屋などが揃った居留地を、「市街清潔にして家屋の構造市店の有様まで毫も内地に異ならず」と述べている。いっぽう、当地の朝鮮人の村落について、彼は、そこに住む人々の衣服は清潔なものが多く、家屋に関しても予め聞いていたほどではないにしろ、「之を人家と云はんよりは寧ろ豚小屋と見做すべし」と言つ。これ以後、彼が朝鮮人が住む村や市街地を訪れるたび、その形容には「汚穢」「豚小屋」という言葉が用いられることになる。

朝鮮に於て婦女は物を肩にすることなく大甕に盛りたる水にても之を頭上に戴く之に反し男子の物を運ぶには皆な之を背に負ふ我が国人の二人にて拳ぐる能はざるものを負ふて絶へて困難の状なし蓋し背に非常に力あり能く重に堪ゆるは朝鮮人の特性なり（『北征録』28頁）

朝鮮人の魚類を籠に載せ之を負ふて元山津に帰るに逢ふ時に夕日燦が如くなれども蓋をなさず思ふに一里の路を往く間には腐敗を生ずるならん前日釜山鎮に趣く途中魚肆を過ぎしが魚を烈日に暴らすを以て往々眼爛れ腸出づ蓋し朝鮮人は魚肉獣肉の腐敗するものを食ふを意とせず之を煎るに多くの唐辛を和する以て臭気を発せずと云つ（『北征録』29頁）

『北征録』を読む限り、そこに住む者との対話的な関係が語られることはなく、鉄腸の観察は常に一方的なものである。村落・市中の衛生の悪さを日本人居留地の「清潔」と対照的に叙述し、ものを運ぶ男たちの膂力を日本人と比較して重労働に向いていると言つ。例えば「征韓論争と政府分裂自体がその一段階を画したような、ことに朝鮮への侮慢と国権拡張への野心は、維新の当初から、すでに覆いがたい国家意志として表明され、実践されはじめていた」と言つ芝原拓自氏のように、日本のナショナリズムが強固になる過程で、朝鮮を自らの影としてきたことは、

これまでに指摘されてきたところだが、当地を訪れて具体的な「觀察」を行った鉄腸の記述は、朝鮮への「侮慢」から発し、また「侮慢」に新たな根拠を与えている。これは自らを「文明」の側に置いた者の、文明人＝日本人としての自己同一性を確かめる手続きであり、アイデンティティ形成の過程で構造化されているものだと言えよう。

『東亜之大勢』では、朝鮮をめぐる情勢、政策論が語られる。鉄腸は、シベリア鉄道建設工事の視察とロシア軍の勢力分析をもとに、ロシアの軍事的な脅威が火急のものではないと判断し、「今や東洋問題の中心たる者は朝鮮に在り」と、清、ロシア、イギリス、日本の争点となつていく対朝鮮政策を緊急の課題とする。第二編「朝鮮ノ形勢」は「朝鮮の魚市場を視るに赫々たる炎天にても魚を地上に曝し往々眼爛れ腸出づ然るに群民は之を購ひ去り割庖して之を意とせず政治上の有様たる亦眼爛れ腸出づるに庶幾し然るに一國を挙げて毫も之を顧みざるもの、如し然れば朝鮮人には一種腐敗を感じざる特性あるか」と書き出される。ここでは、『北征録』で叙述された村落の汚穢が、そこに身を置く不快感を超えて、社会の沈滞や、それを改善することに対する無気力の隠喩となつていくことに気づくだろう。以下、鉄腸が朝鮮を語る上でまず目につくのは、その停滞ぶりを強調していることだ。彼によれば、朝鮮の国情は、実権を握る閔氏の腐敗が極まり、財政の混乱、官吏の横暴とそれに対する民衆の無気力など救いがたい、という論調である。彼は朝鮮について、「政事腐敗して士大夫に國家の觀念なく教育行なはず資本缺乏し人民に勉強心なく職業衰退す」、あるいは「社會に発達の原素無し」と断定する。さらに、防穀令事件については、日本の商人の穀物買占めが原因であることを無視し、責任を朝鮮の官吏の腐敗、横暴に帰している。

もちろん、こうした朝鮮観は鉄腸独自のものではない。例えば、鉄腸

に約半年先立つ『日本之二大政策』で日本の商業と外交政策を論じた大石正巳は、朝鮮を「既に亡び失せたる者」、「所謂國家を組織せる骨子悉く壊壞して殆ど絶望の地位に在る者と云ふべし」と、その荒廃ぶりを述べた後、「朝鮮を純然たる局外中立国たらしむる」ために、日本が「主人公となり委員を列国より招集して先づ朝鮮の独立策を實行せざるべからず」という朝鮮政策を示している。『東亜之大勢』での未広鉄腸は、大石と同様に清、ロシア、イギリス、日本の朝鮮での勢力均衡を主張しているが、彼は、日本のとるべき方針として日清の戦略的連携を説く。明治一七年の甲申事件と天津条約以来、朝鮮における日本の政治力が弱まつていたという状況に加えて、清を軽蔑する者に対して、「我が國人の支那を視るや大にその現象を誤る者あり」というように、鉄腸は清の潜在的な生産力を重視していた。

土地膏腴にして無盡の財源あり加ふるにその人民は勉強勤儉にして最も經濟に長ず若し大豪傑あつて弊政を釐革し進んで大に擴張する所あれば其の勢力は歐洲諸國をも壓倒するに至らん（『東亜之大勢』

199頁）

鉄腸が見た清の国勢は「漸次に進歩する傾向にある」。彼の眼は、おもに清の持つ近代的な国家装置、近代装備と西洋式の訓練が進みつつある陸海軍、および炭田・鉱山の開発、製鉄所の建設、それにつれて整備され始めた鉄道網に向けられている。清は台湾の役の後、日本を仮想敵国にして海軍を増強しており、当時その脅威は日本側の一般認識としてあつた。ただし鉄腸は、清の海軍拡張が清仏戦争を契機に西洋に抗する目的でなされると認識しており、また向う十数年で西洋の列強に對抗できる海軍力を持つだろうと考えていた。彼はこの誤解の上に日清連携説を語つたのである。アジアにおいて「独立を維持するの希望ある者は我國と支那の二國あるのみ」であり、「進んで東洋の平和を維持する

の責に任ずべき者は此の二國に非ずして」ほかにない。「支那」は「同文同種の我國と相提携して歐洲諸國の跋扈を制止せんと欲するや敢て疑を容れざる所」で、「我國の利害より之れを視るも支那とは互に相親和すべくして決して相反目すべからざるなり」というものであった。

『東亜之大勢』末尾では、「露國は畏るべからず朝鮮は棄つべからず支那は侮るべからず」という外交方針が示されているが、鉄腸は訪れた三か國を、進歩という時間的な軸によって序列化し、極東における諸國の力関係の構図を示したのだった。それは「発達の原素」のない朝鮮を、極東での勢力均衡の負の中心点として想定し、清、ロシア、日本、そしてロシアと対立していたイギリスが、朝鮮半島の周囲で力の均衡を維持するということでもあった。この政治的構想では、日本が主体的に外交を行う、言い換えれば国家として確立された主体として国際社会に参入するということが重要視されている。

結び

末広鉄腸は紀行文『北征録』で、未開の朝鮮を描き、相対的に文明の側にいる日本人像を強調した。また『東亜之大勢』では、朝鮮を無力な国家とした上で、朝鮮半島をめぐる英露清との政治的關係に日本が主体的に参加するという見通しを語った。極東旅行について、彼が紀行文と政論という文体の違う二つのテキストを書いたことは、ナショナル・アイデンティティが形成される空間と、一つの国家として主体性をもつ政治空間とが必ずしも重ならないことを示している。だが、国家の理想型として一民族一国家を考えた場合、この二つは統一する必要がある。時を置かずして連載されはじめた『明治四十年之日本』の小説世界では、これらを重ね合わせ、理想の国民国家の空間を形成している。小説の中

で二つを結びつけるのは、国家が対外戦争に直面するという危機感であった。

鉄腸がこの小説の舞台を明治四〇年という近未来社会に設定したのは、シベリア鉄道開通をその年だと予想したからである。山県有朋は明治二三年に、この建設計画を受けて、「我が國、利益線ノ焦点八寅二朝鮮ニ在リ」と述べたが、鉄腸は、この鉄道の開通によって、日本の国土が直接危険に晒されることを想定したのであった。

小説では、シベリア鉄道開通後、ロシアが朝鮮に対する策動を始め、清・英の同盟との対立が深刻になる。鉄腸が『東亜之大勢』で提示した明治二六年当時の勢力均衡はまさに崩れようとしていた。この中で、日本ではめまぐるしい政権交代により、国内交通の整備や軍備増強も進まず、外交姿勢も一貫しない。鉄腸は、こうした状況を描くのに、腐敗選挙を行う候補者と選挙民、商人から不正に利益を得ようとする官吏、闇雲に内地雑居に反対し条約改正を阻害する民衆、そして日本が置かれた国際的な位置に危機意識を持たず、自党の権力確保にあくせくとする政治家を挙げ、玉野にそれに対する嘆きや怒りを語らせている。

外国から帰つて来て一番愉快を感じるのは山水の美麗なのであるが政事上の有様は実に意外千万であるア、此の立派な国土を永遠に維持することが出来れば善いが……小党派の軋轢で対外策が定まらず人心の瓦解するのは国民が一小党内に局促して海外の形成を知らぬ故である外部からの刺衝でなければ内政の改革は逆も出来まい（前

編第二回）

ここで言われる「外部からの刺衝」とは対外戦争のことである。玉野とともに国家の危機を心配する海軍将校山口は、それをよりあからさまに口にする。

日本國中私利心に支配せられて愛國心が次第に薄くなつてくるから

是れでは逆も我国を維持する事は六ヶしからう次第に東洋の形成が切迫して来るのが実に好機会ぢや露西亜なり支那なり英国なりを相手にして戦争をするが善い大破裂弾がヒユウく東京の真中へ飛んで来る様になつたら始めて国民の夢が覚めるであらう今日の様に一國の精神が無くなつて仕舞ふては何な豪傑が出た処が平和の手段で改革する事は出来まい(前編第一五回)

玉野と山口が対外戦争を要請するのは、それが、腐敗政治の中を生きる人々に、國家の滅亡が存続かという二者択一を迫り、「日本国民」だと自覚させる契機を与えるという意味においてである。事態は二人の希望通りに進行する。清・英同盟とロシアとの戦争が始まると、参戦が中立か明確な方針を出さない日本政府を脅迫するために、両陣営の軍艦が東京湾に侵入し、首都は恐慌に陥る。政府は当初清・英同盟に与するもの、クーデターによりロシアの傀儡政権が成立した後はロシアに味方するといった按配で、信用を失つた拳句、休戦後三か国からそれぞれ領土の割譲を要求され、さもなければ戦争という窮地に追い込まれた。否心なく巻き込まれた戦争によって、明治二六年からの一五年間の無為が一挙に顕在化したのである。

日本が直面する危機的な状況を生んだ一五年の無為は、時間の経過が、それだけでは進歩を保証しないということを意味する。國家が進歩を遂げるには、進歩させようという意志と不断の試みが必要なのであり、それは同時に、國民國家の成員たるべき者が、自分自身を「國民」であると自覚することでもある。対外戦争とその実質的な敗北によって、人々は国際政治の中の日本の位置と、一五年間の無為を知る。そして、その無為が生みだしたロシアや清との進歩の差、外交政策の不徹底、軍備、国内交通、産業の不足をただし、補填しようと努力を始めるだろう。そのとき、国内に澱んでいた時間が流れ出すのだ。

だが、これまで見てきたように、その過程には、文明と野蛮という二項対立で他者を貶めることが構造的に組み込まれている。また、玉野が「未だ充分に事業の起らぬのに法律上を以て労力家を保護する一方に傾くと資本を卸して工業を始めるものが無くなるから却て労力家の迷惑を生ずる様な結果になる」と言うように、國民の中で國家の進歩に取り残されてゆく人々の存在も予言されている。政策として産業の発展を優先させ、「労力家」の「保護」を先送りするという考え方には、国内のあらゆる階層の人々を國家の名のもとに一元化するという含みがあるが、鉄腸は國民國家の完成と繁栄が貧困の問題を解決することを期待していたと思われる。例えば『雪中梅』冒頭に描かれた、明治一七三年三月三日の東京は、煉瓦造りの近代建築と黒煙を上げる工場群で埋め尽くされ、繁栄をきわめている。それは「富国強兵」を地で行く姿であるが、描かれぬ場所で、現実の人間の生が「國家の発展」に篡奪されていることをも想起させるだろう。

『明治四十年之日本』で示される日本の理想像は、南洋、東洋に植民地を獲得し、西洋の強国に肩を並べるといふものだ。小説の大団円で、玉野は日本人の行き着くべき先について次のように演説している。

近來歐洲諸強國は頻りに東洋諸國を蚕食し今日にては南洋中の一小島すらも我國に於て手を付る場所なき有様となりました然れども早晩氣運の一変する時節があります(中略)諸君よ國民の一致協同を謀つて全力を外に向け我が日章の國旗をして南洋諸島を始め東洋の要地に翻々たらしむるは愉快の至ではありませんか(後編第一六回)だが、日本の發展や対外拡張には、おそらく達成点はない。「日本人」であるということは、「日本人」であろうとすることによって初めて意味を持つことだからである。鉄腸の世界旅行体験が示しているように、「進歩」した西洋に対する遅れや欠如感に悩まされるという他者との関

係のあり方でしか自らを日本人として同定できず、また、それを補填しようとして試みることは日本人たり得ないのだとしたら、その欠如感は埋められることない。日本人であるためには、常にながしかの不足を自らに見出し続けなければならず、そしてまた、自らの陰として排除する他者を探し続けなければならない。言い換えるなら、日本人としての自己同一化のためめ試みが、西洋に対して、常に自らを未完のままに置き続けることを原動力にしている限り、文明と未開の二項対立から逃れることはできず、日本人は西洋に「文明」を、アジアに「野蛮」を見出し続けなければならないだろう。

ナショナル・アイデンティティの形成と国民国家の創出を、対外戦争を虚構することによって志向する『明治四十年之日本』は、逆に見れば、「日本人」が非本質的で歴史的に構築された概念であるということ、そして、その過程で行われるのが、現実に生きている人間を疎外し貶めることだということを露呈している。この小説が文学史から忘れられていることは、国家草創期の礎は、その「成功」の中で埋もれるものだということを意味するのかもしれない。だとすれば、この小説を掘り起こし、その「非本質性」を批判的に読もつとする者は、自らが何者で、どこに向かおうとしているのかを問われる場所に立つことになるのである。

(付記) 本稿が底本としたのは国立国会図書館蔵『政治小説明治四十年之日本』(初版、前編明治二六年五月二〇日、後編同年七月六日、青木嵩山堂)マイクروفリッシュ版である。

注

- ① 『東亜之大勢』緒言 1頁
 ② 『東亜之大勢』緒言 10頁～11頁

- ③ 前編は明治二六年五月二〇日。後編は同年七月六日に出版されている。
 ④ 『政治小説研究』中 一九六八・九・五 春秋社、503頁。この小説について言及のある研究論文を以下に記す。「末広鉄腸における日本とアジア」『国際基督教大学学報 A アジア文化研究13 一九八一・一一』において、武田清子氏は、「緊迫したアジアの現実と、それに対して無知で無防備な日本の現実を憂えるところの現実主義的危機感が強く訴えられている」と言う。また林原純生氏は以下のように述べている。「鉄腸が書いた多くの小説が彼の政論の解説になっていることは、当時の啓蒙家として時代的な限界を持っていた彼としては当然のことと言える。例えば、『東亜の大勢』(明26・1)と『明治四十年の日本』(明26・3・11)6・4「国会」などは、彼の政論と小説の関係の分かりやすい見本と言える」(『政治小説「雪中梅」を読む 末広鉄腸の見果てぬ夢』『日本文学』一九九一・七)。「政治」と「文学」とを截然と分けることが前提となっているこれらの論を誤りであるとは思わないが、本論では、政治的想像力と文学的な想像力を分別し得ないところで『明治四十年之日本』を考察すべきであると考えた。
- ⑤ 「新刊雑書」『朝野』明治26・6・18
 ⑥ ⑤に同じ
 ⑦ 「新刊批評」明治26・8・3
 ⑧ 小説の政治的効果や啓蒙的な機能を重視するこうした言説は、例えば明治三年にかわされた、矢野龍溪の『浮城物語』(明治23)の是非をめぐる、龍溪と、内田魯庵・石橋忍月の論争の争点を引き継いだものと言えるだろう。国事や冒険を題材にした『浮城物語』は、「形式」より「内容」に美を求める忍月にとっては、真実らしさの欠如した、「内容」のない、すなわち「美」のない小説であった。また、娯楽を第一義とする龍溪の小説論は、魯庵にとつては認めがたいものであり、内面のない登場人物に自己を重ね合わせることができなかった。これに対して、龍溪は、彼の批判者が拠り所にした「美」を理解することはできない。「浮城物語立案の始末」(『国民新聞』明治23・6・28)7・2)において彼は、小説の機能として、「読者に娯楽を与ふる」ことを正産物、「世を矯め俗を激し人を戒め時を諷する」ことを副産物であるとし、

- 絵画を例にとつて、題材が書き方を規定する一種の形式主義を説いたのだつた。この龍溪の小説論と同じ枠内に『明治四十年之日本』を見ることは難しくない。実際、『早稲田文学』では、奥泰資がこの小説を「政事上の事を対岸の火事と思ふ者若し此の書によりて現在並びに将来に於ける我が国の情勢を窺うことを得んか龍溪居士の所謂文学的副産物の効能小少ならずといふべし」(『文界現象』、『早稲田文学』、明治26・6・25 45号)と評している。『明治四十年之日本』は、国事を題材にした啓蒙的な機能を持つ小説として遇されたとみることができよう。
- ⑨ 11版は上下合巻で嵩山堂から発売されている。
- ⑩ 「政治小説『明治四十年之日本』に現れたる支那観」(『对支問題』、一九三〇・一二・二五、日本評論社)。引用は『吉野作造選集』七卷(一九九五・八・八、岩波書店)より。
- ⑪ 『日本文壇史』七(一九六四・六・一〇、講談社)。「政治小説『雪中梅』の著者で、のち代議士となつた末広鉄腸が「明治四十年の日本」という小説を明治二十六年五月に出した。この小説ではイギリスが清国と協力してロシアと戦つて破れ、その後日本がロシアを破ることになつていた。」
- ⑫ 『政治小説研究』507頁
- ⑬ 「未来記の時代」『文学』9巻4号(一九九八秋)
- ⑭ 明治19・5
- ⑮ 上編明治19・8、下編同年11
- ⑯ 上編明治20・4、中編同年10、下編明治21・3
- ⑰ 「数種ノ小説ヲ著シ潤筆錢ヲ以テ旅費ニ充ルヲ以テナリ」(『唾之旅行』自序)
- ⑱ ホセ・リサル(一八六一〜一八九六)は、一八八八年二月のフィリピン退去をきつかけに、アメリカを経てヨーロッパに至る旅行をしたが、その途上東京に立ち寄つている。その滞在期間は二月二十八日から四月二三日で、この間にある程度の日本語が話せるようになったといわれている。
- ⑲ 明治22・7 博文堂
- ⑳ 「末広重恭通信」6月11日ロンドン発 『朝野新聞』明治21・7・22
- ナショナル・アイデンティティの形成とその行方
- ⑲ 『朝野新聞』明治21・9・1
- ⑳ 前編明治22・12・9、後編明治24・2・14、続編明治24・9・27 嵩山堂
- ㉑ 『唾之旅行』4頁
- ㉒ 『唾之旅行』後編151頁
- ㉓ 同右
- ㉔ 『唾之旅行』後編161頁
- ㉕ 『唾之旅行』続編9頁
- ㉖ 「ツリーズムと国民国家」『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』西川長夫・渡辺公三編(一九九九・二・二八、柏書房)256頁
- ㉗ 同右258頁
- ㉘ 『唾之旅行』続編111頁
- ㉙ 同右135頁
- ㉚ 『唾之旅行』続編151〜152頁
- ㉛ 『北征録』4頁によれば、鉄腸が村山から依頼を受けたのは出発前の神戸滞在中であつた。
- ㉜ 明治26・2・10 青木嵩山堂
- ㉝ 『北征録』16頁
- ㉞ 同20頁
- ㉟ 「対外観とナショナルリズム」『日本近代思想大系12 対外観』(一九八八・一一・二二) 岩波書店)472頁
- ㊱ 『東亜之大勢』128頁
- ㊲ 同右130頁
- ㊳ 同右152頁
- ㊴ 同右150頁
- ㊵ 明治25・9・12 嵩山堂
- ㊶ 『日本之一大政策』16頁
- ㊷ 同右35頁
- ㊸ 『東亜之大勢』196頁
- ㊹ 同右200頁
- ㊺ 同右208〜9頁

④8 同右 225頁

④9 「外交政略論」(明治23・3)『日本近代思想大系12 对外觀』

(本学大学院博士後期課程)